

一般社団法人
兵庫県病院協会
会 報

● 発行 ●

一般社団法人兵庫県病院協会

〒651-0086

神戸市中央区磯上通

6丁目1番11号

兵庫県医師会館7F

TEL (078) 251-3030

FAX (078) 251-3011

会報編集委員会

印刷 株式会社 七旺社



目 次

— 巻頭言 —

音楽に救われたものにしか、音楽でひとを救うことはできない

(一社) 兵庫県病院協会副会長

医療法人社団さくら会 高橋病院

理事長・病院長 高橋 玲比古 3

— 随 筆 —

西播磨医療圏に向けた医療と介護の将来像 — 病床増設から在宅医療への転換を

(一社) 兵庫県病院協会理事

医療法人社団緑風会 龍野中央病院

理事長・院長 井上 喜通 4

地方病院が直面する苦境と持続可能な医療のために

(一社) 兵庫県病院協会理事

公立豊岡病院組合立 豊岡病院

病院長 三輪 聡一 5

= 事務局短信 =

兵庫県病院協会 第11回定時総会

兵庫県知事感謝状贈呈式・永年勤続病院職員表彰式・記念講演会 7

= 役員就任のご挨拶 =

(一社) 兵庫県病院協会副会長 学校法人兵庫医科大学

常務理事・病院事業管理者 阪上 雅史 10

(一社) 兵庫県病院協会理事 日本赤十字社 神戸赤十字病院

院長 築部 卓郎 10

(一社) 兵庫県病院協会理事 兵庫県立尼崎総合医療センター

院長 大嶋 勇成 11

(一社) 兵庫県病院協会理事 西脇市立西脇病院

病院長 片山 重則 11

(一社) 兵庫県病院協会理事 医療法人公仁会 姫路中央病院

理事長 東 靖人 12

(一社) 兵庫県病院協会理事 赤穂市民病院

院長 林 晃史 12

一般社団法人兵庫県病院協会 第6期役員 13

= 会員病院紹介 =

社会医療法人愛仁会 明石医療センター

病院長 大西 尚 14

= 編集後記 =

(一社) 兵庫県病院協会理事・会報編集委員

日本赤十字社 姫路赤十字病院

院長 岡田 裕之 16



〈表紙の写真〉

シワガラの滝 (新温泉町)

滝愛好家のなかで人気が高い、新温泉町の名瀑、シワガラの滝。滝は洞窟の内部にあり、落差はおよそ十メートルあります。滝は洞窟の中からしか見ることができません。洞窟内は水の音が反響し、岩の切れ目から光が射し込み、神秘的な光景です。秘境の滝として知られ、メディアにも紹介されることが多いですが、急カーブ、急勾配な場所にあるので、滝のある渓谷は上級者向けのコースです。よく知られていることですが、滝の周辺は水が激しくぶつかり合うことで、マイナスイオンが発生します。マイナスイオンはリラックス効果やストレス軽減効果があると言われています。また、滝の音には、1/f ゆらぎというリズムが含まれており、このリズムもリラックス効果があるそうです。

巻頭言

音楽に救われたものにしか、
音楽でひとを救うことはできない

(一社)
兵庫県病院協会 副会長
医療法人社団さくら会 高橋病院
理事長・病院長 高橋 玲比古

最初は何かの間違いかと思いました。それがついに現実となりました。世界的なバイオリニストである五嶋みどりさんが、ボランティアとして当院に来られたのです。患者さんのために音楽を届けたいというご本人の強い思いから実現した訪問でした。入院していた患者さんたちはもちろん、私たち病院職員にとっても決して忘れることのできない1日となりました。

五嶋さんは幼少期からバイオリンを始められましたが、その才能はたちまち周囲に見出されることになりました。1982年、10歳で渡米し、ジュリアード音楽院に進学。その年にデビューも果たされました。非凡な才能は彼の地でも際立ち、順調に歩みを進められていきました。そして、五嶋さんがその名を世界に刻むこととなったのが、1986年7月27日、ボストン郊外で開催されたタンゲルウッド音楽祭での出来事でした。巨匠レナード・バーンスタイン氏が指揮するボストン交響楽団との共演中、彼女のバイオリンの弦が2度にわたり切れました。当時、五嶋さんは14歳でした。最初はコンサートマスター、続いて副コンサートマスターからフルサイズのバイオリンを借りて演奏を続け、見事にこの困難を乗り越えたのです。演奏終了後、巨匠が彼女の前に跪いたこの出来事は、五嶋さんを一躍、伝説的存在へと押し上げました。このエピソードは翌日の『ニューヨーク・タイムズ』紙の1面に「*Girl, 14, Conquers Tanglewood with 3 Violins*」という見出しで掲載され、「タン

ゲルウッドの奇跡」として、アメリカの小学校の教科書にも取り上げられました。

6月13日、私はひとりJR鷹取駅の改札口で五嶋さん一行の到着を待っておりました。五嶋さんは数名の若い伴奏者とともに駅のホームから階段を下りてこられました。半袖シャツ姿でバイオリンケースを背中に背負ったその小柄な姿は、とても世界を舞台に活躍されている音楽家とは思えませんでした。それは昼下がりの駅周辺の景色に自然に溶け込み、近隣の高校の音楽部の学生のようなでした。病院の食堂で昼食を済まされた後、五嶋さんは病室を訪問されました。各病室を一つひとつまわられ、患者さんの枕元でバイオリンを奏でられました。それぞれの演奏は1曲から2曲と短いものでしたが、病室の患者さんだけでなく、廊下で漏れ聞こえる美しい旋律に耳を傾けていた私たち職員にとっても、深い感銘を残すものでした。なかでもひととき印象的だったのは、数週間前に心肺停止で搬送され、心肺蘇生に成功したものの意識が戻らなかった患者さんの前でふるまいでした。気管切開を受け、人工呼吸器が装着されたその方に向かい、五嶋さんはまるで意識があるかのように優しく語りかけてから演奏を始められました。演奏を終えると、バイオリンをそっと脇に抱え、再び静かに声をかけ、患者さんの手を重ねておられました。監視モニターでは、心拍数がわずかにふえていました。

意思表示が困難な状態にあっても、変わらぬ敬意をもって接する—その姿からは、これまでも国内外の多くの施設をボランティアとして訪ねられてきた、五嶋さんの活動の真髄に触れたような気がいたしました。

五嶋さんはかつて、「演奏者が音楽に救われた体験をしなければ、聴き手を音楽で救うことはできません」と語られていたそうです。音楽家としての五嶋さんが、どのような経緯で音楽に救われたのか。それは私たちには分かりません。しかし、その言葉の重みと真意が、この日の彼女の行動の一つひとつを通して、私たちに伝わってきました。卓越した技術と経験で世界的な名声を得ながらも、なお人としての共感力をもって、救いを必要

とする人々を音楽で支えようとする姿。分野は異なりますが、同じように技術や経験が重視される医療の現場に身を置く者として、あらためて何が大切なのかを教えられた思いがしました。

音楽は、薬や手術のように患者さんを直接治すものではありません。しかし、音楽は、人の気持ちを落ち着かせつらい状況の中で心の支えとなる力を持っています。そしてその力は、それを届ける人のこれまでの生き方や思いによって、より大きく、深く響いていくのだとあらためて感じました。患者さんのなかには、ピアニストとしてベルリンに留学している娘さんとともにこの瞬間を過ごすため、枕元のスマートフォンをつないだままにしている方もおられました。タングルウッドから38年、五嶋みどりさんがもたらす音楽の力は、入院中の患者さんのみならず、遠く離れて暮らすご家族の胸をも揺さぶり、小さな“奇跡”としてそれぞれの心に刻まれました。

随 筆

西播磨医療圏に向けた 医療と介護の将来像 ― 病床増設から在宅医療への転換を



(一社) 兵庫県病院協会 理事
医療法人社団緑風会 龍野中央病院
理事長・院長 井上 喜通

2040年、西播磨医療圏では後期高齢者人口が現在の約1.3倍にあたる約7万人に達すると見込まれており、人口の約4割を75歳以上が占める「超高齢社会」となる。これに伴い、医療・介護の需要は急増するが、それをすべて病院や施設で対応することは現実的ではない。むしろ、医療資源が限られる中で、地域完結型の医療提供体制の構築、特に「在宅医療・在宅看取り」の強化こそが不可

欠である。

現在、西播磨には約600床の療養病床が存在するが、兵庫県が策定した地域医療構想では「療養病床は約150床過剰」とされており、新たな病床整備には慎重な対応が求められている。にもかかわらず、一部地域では介護医療院の増床新設計画が存在する。介護医療院は療養病床の代替として想定されたものであり、本来は既存病床の「転換」が前提であって、新規増設は地域医療構想の方針と乖離している。このようなこともあり当該地区の自治体と医師会の間で議論が交わされている。

ここで重要なのは、患者や家族が本当に望んでいる医療のあり方である。厚生労働省の調査(2022年)では、「住み慣れた自宅で最期を迎えたい」と希望する高齢者は全体の60%を超えている。一方で、実際に自宅で看取られる割合は全国平均で14%にとどまり、西播磨においても同様の水準とみられる。この乖離を埋めるためには、病床を増やすことなく、「在宅医療を支える仕組み」を整備することが喫緊の課題である。

西播磨圏内では、在宅療養支援診療所や訪問看護ステーションの数が都市部に比べて依然少なく、2023年時点で訪問看護ステーションの数は医療圏全体でわずか15カ所、人口あたりでは全国平均の6割程度にとどまる。また、訪問介護人材も不足しており、夜間対応が可能な事業所はごく一部に限られている。こうした現状を踏まえ、病床整備に偏った投資ではなく、在宅医療・看護・介護の連携体制を強化することが求められる。

特に、「多死社会」を迎える2040年に向けては、自宅や施設での看取りを可能にする地域包括ケアの確立が不可欠である。療養病床や介護医療院の増設は、医療資源の固定化を招き、結果として地域の柔軟な対応力を削ぐ恐れがある。むしろ、在宅医療を担う人材の確保、ICTを活用した遠隔診療体制の整備、24時間対応可能な訪問看護の体制構築など、「地域で暮らしながら最期まで過ごせる仕組み」にこそ、公的資源は優先的に投じられるべきである。

2040年の医療と介護を支えるのは、新たなベッド数ではなく、「どこで、どう生き、どう死ねるか」

という住民一人ひとりの尊厳に寄り添った選択肢である。その実現には、病床偏重の発想からの転換と、地域ぐるみの医療・介護体制の再構築が求められている。

地方病院が直面する苦境と 持続可能な医療のために



(一社) 兵庫県病院協会 理事
公立豊岡病院組合立 豊岡病院
病院長 三輪 聡一

日本の医療制度は、国民皆保険という世界に誇る仕組みを支えに、都市部から地方に至るまで一定の医療サービスを提供してきました。しかし、その均質性の裏で、特に地方病院は慢性的な課題に直面しています。人口減少と高齢化が著しく進む中、地方医療の維持はますます困難になっており、持続可能な体制の再構築が急務です。

中でも顕著なのが、地方における医師不足の問題です。全国的に医師数は増加傾向にあるものの、その分布には大きな偏りが存在します。都市部に医師が集中し、地方では常に人材確保が困難な状況が続いています。若手医師の多くは、専門研修やキャリア形成の機会が豊富な都市部を志向します。加えて、家族の教育環境や配偶者の就労先の選択肢など、生活全般を考慮すると、地方での医師の定着は容易ではありません。

こうした背景の中、地方病院では医師一人ひとりに負担が重くのしかかります。特に救急医療の分野では、都市部のような一次救急から三次救急までの機能分担が整っていない地域が多く、地方病院の中でも中核病院がそのすべてに対応せざるを得ない状況に置かれています。

当院も例外ではありません。公立豊岡病院は、但馬地域という兵庫県北部の広域医療圏に位置し、地域唯一の救命救急センターとしての役割を担ってい

ますが、地域内での医療機能分担が不十分なため、夜間・休日を問わず、あらゆる救急患者に対応しなければなりません。つまり、救命センターでありながら、軽症から重篤な症例まで、すべてを一つの病院で受け入れる必要があるのです。

このような「すべてに対応せざるを得ない」体制は、医師の過重労働を招くだけでなく、専門性の確保や質の高い医療提供にも影響を及ぼします。医師が疲弊すれば、当然ながら医療の安全性や継続性にも支障をきたします。それにもかかわらず、病院としては地域住民の「最後の砦」としての責務を果たす必要があるという、非常に困難な立場に置かれているのです。

「医師の働き方改革」という枠組みの中で救急医療体制を維持するためには、もちろん多数の救急医が必要となります。当院では、幸いなことに、20数名という多くの救急医がおりますが、これでも十分ではありません。それに加えて救急医療に関連した診療科（心臓血管外科、脳神経外科、循環器内科、脳神経内科、消化器内科、総合診療科、整形外科、産婦人科、小児科、麻酔科など）においても、夜間・土日・祝日などの緊急患者への対応のために、オンコール体制または当直体制を維持しなければなりません。そのため、これらの診療科では、通常診療だけであれば、ぎりぎりやっつけていける医師数を確保できているのですが、救急医療を維持するために多くの応援医師を外部から招聘せざるを得なくなっています。

こうした外部医師の応援も、都市部の病院に比べて高額な報酬や交通費を支払わなければ実現できません。常勤医を含め、地方に来てもらうためには、待遇面で都市部以上の条件を提示する必要があります。また、地方の場合、学会等への出張も長距離移動が避けられず、都市部と比べて出張の長期化による宿泊費や交通費等の経費が大きく膨らみます。出張が長期化すると、病院での医師の勤務日数が相対的に減少することになり、医師不足に拍車をかけます。このように、地方で医療を維持するには、都市部以上の経済的負担を伴うという現実があります。

加えて、当院は地域で唯一の急性期総合病院で

あるため、不採算とされる診療科でもすべて担わざるを得ません。また、常勤医が不在の診療科では高額な出張診療を依頼して維持しています。地域住民の命と生活を守るため、経営効率を優先できず、収支均衡を図ることは困難な状況です。本来であれば、こうした地域医療提供の難易度に応じた報酬体系が構築されるべきですが、現状では都市部とほぼ同様の診療報酬体系が適用され、地方特有の負担に十分対応できる仕組みとなっていない。

また、医療機関の統廃合や再編が進められる中、地方における「アクセス可能な医療」はますます希少なものになりつつあります。そこに追い打ちをかけるのが、近年の人件費と物価の高騰です。医師・看護師・技師などの専門職の確保のためには、これまで以上の待遇改善が不可欠となっています。医療資材やエネルギーコストも高騰し、病院経営を圧迫しています。しかしながら、こうしたコスト上昇に見合った診療報酬改定は十分に行われておらず、地方病院は過去に類を見ない危機的な経営状況に置かれています。

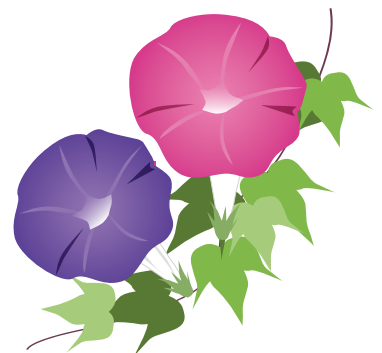
現行の医療政策にも構造的な課題が残されています。例えば、専攻医採用におけるシーリングに使用しているデータは都道府県単位で集計されているため、県内に一部都市部が存在すれば、県全体では「医師充足」と判断されてしまい、実際に深刻な医師不足に陥っている地方圏の状況が反映されません。また、医師の自由開業が原則認められている制度も、都市部への医師の集中を助長する要因となっています。このように、医師の偏在に対して有効な施策は図られておらず、地方での計画的な医療提供体制の構築が困難な状況が続いています。

このままでは、医療提供体制そのものが維持できなくなる地域が現れる危険性が、すぐ目の前に迫っています。地方における医療は、単なる「病院の存続」だけでなく、地域社会全体の存続に直結する問題です。なぜなら、医療がなければ高齢者や子育て世代は安心して暮らすことができず、移住・定住の妨げにもなります。救急搬送や在宅医療が機能しなければ、福祉・介護の仕組みも立

ち行かなくなり、やがては地域そのものが衰退していくからです。

このような状況を打開するには、まず地方病院に医師が安定的に配置される仕組みの整備が必要です。地域ごとに実情に応じた必要医師数を正確に把握し、地域偏在に応じた制度的誘導策を講じること、そして地方の特性に即した診療報酬体系の抜本的な見直しが不可欠です。あわせて、医療・介護・福祉・生活支援が一体となった地域包括ケアの推進を通じて、地域全体で医療を支える体制の強化が求められています。

私たちが今直面しているのは、一つの病院や地域だけの問題ではありません。地方医療の存続は、日本全体の医療の質と公平性を問う問題です。誰もが住み慣れた地域で、安心して医療を受けられる社会の実現に向けて、今こそ真剣な議論と行動が必要であると感じています。



＝事務局短信＝

兵庫県病院協会 第11回定時総会 兵庫県知事感謝状贈呈式・永年勤続病院職員表彰式 記念講演会

1. 第11回定時総会

6月21日（土）午後1時30分から兵庫県医師会館において、第11回定時総会が開催されました（出席者は、委任状提出、議決権行使を含め153名）。

眞庭謙昌副会長の開会宣言、大村武久会長の開会挨拶に続き、来賓の山下輝夫兵庫県保健医療部長、八田昌樹兵庫県医師会会長からそれぞれ祝辞をいただいた後、大村会長が議長となり、議事が進められました。



大村武久会長 開会挨拶



来賓挨拶（山下輝夫県保健医療部長、八田昌樹県医師会会長）

(1) 報告事項

平田健一副会長から「令和6年度事業報告」、「令和7年度事業計画」及び「令和7年度収支予算」について報告があり、異議なく了承されました。



報告事項及び議案の説明

(2) 議案

・第1号議案 令和6年度収支決算について承認を求める件

高橋玲比古副会長から貸借対照表、正味財産増減計算書等による説明に続いて山下晴央監事から決算審査報告があった後採決に移り、全会一致で異議なく承認されました。

・第2号議案 第6期理事及び監事選任の件

議長から第6期（令和9年度総会まで）理事・監事候補者の紹介があった後採決に移り、全会一致で異議なく承認されました。

・第3号議案 名誉会長及び顧問の選任の件

議長から名誉会長及び顧問候補者の紹介があった後採決に移り、全会一致で異議なく承認されました。

以上で審議は全て終了し、太城力良副会長の閉会宣言で総会は終了しました。

また同日、臨時理事会が開催され、新たな理事及び監事の互選により、会長に大村武久理事が、副会長には平田健一理事、高橋玲比古理事、眞庭謙昌理事、阪上雅史理事の4名が選出されました(第6期役員等は13ページに記載のとおり)。

2. 兵庫県知事感謝状贈呈式・永年勤続病院職員表彰式

総会に続き、長年にわたり病院職員として勤務し地域医療に貢献された方々に対し、兵庫県知事感謝状の贈呈、及び永年勤続病院職員表彰が行われました。

兵庫県知事感謝状については山下兵庫県保健医療部長から、永年勤続病院職員表彰状については大村会長から、代表者に賞状と記念品が手渡され、両氏からお祝いのことばをいただきました。

◆兵庫県知事感謝状

・46病院148名

代表：丸山病院 中野 恵美子 様



知事感謝状の代表受領

◆永年勤続病院職員表彰

・30年勤続 77病院361名

代表：加古川中央市民病院 森岡 美香 様



30年勤続表彰状の代表受領

・20年勤続 101病院549名

代表：神戸労災病院 藤本 由紀恵 様



20年勤続表彰状の代表受領

3. 記念講演会



記念講演 (小林大介先生)

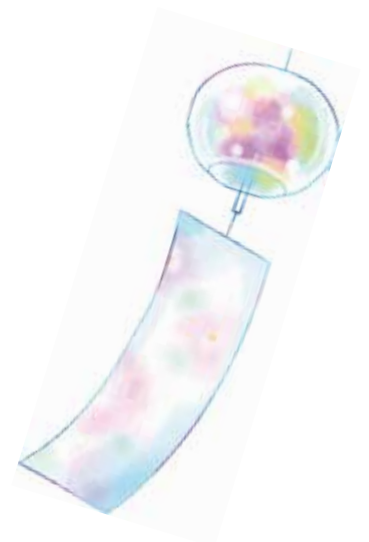
表彰式終了後、富山大学附属病院病院長特別補佐(経営担当)・客員准教授の小林大介先生から、「2040年を見据えた新たな地域医療構想と今後の経営戦略」と題して記念講演会が開催されました。

小林先生は、現在の「地域医療構想」について、「2025年における病床の必要量を圏域ごとに策定し、病床必要量に近づけていくことが目的となってしまう、主に公立公的医療機関の急性期病床の削減政策と受け取られた面があったが、本来は急性期病院における診療疾患の把握と将来予測を的確に行い、併せてマンパワーや病床がどの程度必要かを検討する必要があった。また、回復期病床の定義も曖昧で、機能転換に際して医師やコメディカルをどの程度配置する必要があるかといった議論につながらなかったことがうまくいかなかった一つの理由」と分析し、2040年に向けた新たな地域医療構想については、「今後高齢者人口はもう少し増加するため、医療需要は2035年頃までは増加すると考えられるが、医療ニーズの内容は変化すると思われる。その一方で生産年齢人口の減少によりマンパワー不足の状況がより一層大きくなる。そのため、『治す病院』と『治し支える病院』に機能分化と連携

を進めることにより、医療提供体制の効率的な再構築を行っていく必要がある。特に急性期拠点機能については、医療従事者や高額医療機器も含めた医療資源の集約化と機能分化を補うネットワーク化が必要となるだろう。地域では、データに基づく課題分析、将来予測を行い、過剰となる分野、不足となる分野とその量を測ったうえでどの病院がどういう対応をするのか、ひとつではなく複数の病院がタッグを組むのか、といった議論を進める必要がある」と述べました。

さらに、物価高騰、人件費高騰の影響については、「骨太の方針に書き込まれたこともあり、次回の診療報酬改定や補助金で多少カバーしてもらえるかもしれないが、さらなる賃上げも行われるため、病院経営は楽にはならない。引き続き気を引き締めていく必要がある」との見解を示しました。

最後に、平田副会長からお礼のことばと閉会の挨拶があり、総会と関係行事は、すべて終了しました。



役員就任のご挨拶



副会長

学校法人兵庫医科大学
常務理事・
病院事業管理者
阪上 雅史



理事

日本赤十字社
神戸赤十字病院
院長 築部 卓郎

この度、兵庫県病院協会の理事（副会長）に就任させていただきました兵庫医科大学の阪上です。1980年阪大卒業後に耳鼻咽喉科に進み、1994年11月より兵庫医科大学に在籍し、2019年4月～2024年3月の5年間病院長を務め現在に至ります。

病院長に就任するまでの40年間、慢性中耳炎や真珠腫、人工内耳などの中内耳手術に専念して病院運営や経営とは別世界におりましたので、65歳になって初めて財務3表などの経営の基礎を一から勉強しました。コロナ禍では、感染症やICUに素人の病院長でしたので、感染制御部や救命救急センター、看護部をはじめ全職員に助けられ、「多職種連携 one team」の重要性を実感致しました（図1）。現在は西宮本院、ささやま医療センター、梅田健康医学クリニックの運営に携わり、全職員が「同じ方向」を向くように努力しております。

まだまだ未熟者ですが、兵庫県病院協会に少しでも貢献できるように精進して行く所存ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。

このたびは兵庫県病院協会理事にご選任いただきありがとうございます。令和7年4月1日付けで神戸赤十字病院院長に就任いたしました築部卓郎（つくべ たくろう）です。出身は兵庫県、1985年に神戸大学を卒業しました。専門領域は心臓血管外科です。2003年7月に心臓血管外科部長として、新規開院しました神戸赤十字病院・兵庫県災害医療センターに赴任し、心臓血管外科部門の立ち上げ並びに特に当院の強みの緊急疾患に対する手術治療に力を入れ多数執刀してきました。令和3年4月に副院長に就任し、病院経営を中心としてさまざまな分野の運営・管理業務を経験し、これからは病院全体の運営・管理を担当する立場となり身の引き締まる思いです。

さて、日本の医療界は高齢化社会に対応すべく、第8次医療計画、地域医療構想に基づく病床機能の再編が進められ、さらに新たな地域医療構想では入院医療だけでなく、外来・在宅医療、介護との連携等を含む、医療提供体制全体の課題解決を図るとされています。当院も存在意義のある病院と認められるように、社会のニーズに応じた変貌を遂げる覚悟が必要と感じております。地域の皆様の支えにより、おかげさまで当院は開院後23年となりました。病院理念である「わたしたちは、医の倫理と人道・博愛の赤十字精神に基づき、皆さんの健康に奉仕いたします。」に基づいて、安全で高度な医療を提供する体制を整えるとともに、患者さんやご家族から求められる良い医療を目指しています。さらに、赤十字の使命である国内外の医療救護活動を継続していきます。より一層、地域住民や近隣の医師との調和を重視し、信頼される安心な医療を提供することを私たちの使命であると考えています。兵庫県病院協会の会員の皆様方のご指導、ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。



図1

**理事**

兵庫県立
尼崎総合医療センター
院長 大嶋 勇成

この度、兵庫県病院協会理事を拝命しました兵庫県立尼崎総合医療センターの大嶋勇成です。私は昭和60年に京都大学を卒業後、兵庫県立塚口病院で勤務し、その後、大学院、関連病院、留学を経て、福井医科大学・福井大学で26年間勤務しました。前職の福井大学小児科教授、附属病院長を退任し、本年4月から35年ぶりに尼崎に戻ってきました。専門はアレルギー・免疫です。少子高齢化、人口減が進む地方で大学病院に求められるものと、人口約175万人の医療圏にある公的病院に求められるものとの違いを日々感じています。当院は兵庫県立尼崎病院と塚口病院が統合し、本年7月で開院10周年を迎えます。開院以来、高度良質な医療による社会貢献を基本理念とし、救命救急センターを中心とした断らない救急、充実した小児・周産期医療の提供を目指してきました。近年では、地域がん診療拠点病院として増加するがん患者への集学的治療体制の強化、患者サポートセンターによるpatient-flow-managementを推進しています。令和5年9月に策定した当院の中期経営ビジョンに基づき、本格的な地域完結型医療の推進、マネジメント・サービスの更なる充実を図り、一人ひとりの患者さんにとって最適な医療と療養環境を提供できるように努めていきます。高齢者人口に比べ現役世代が急減する2040問題に対応するため、AI等のIT活用も視野に、疾病構造の変化、新興感染症や大規模災害に対しても柔軟に対応できるよう組織としてのレジリエンスを高めることが課題と考えております。兵庫県病院協会の先生方のご支援ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

**理事**

西脇市立西脇病院
病院長 片山 重則

この度、兵庫県病院協会理事に選任いただきました西脇市立西脇病院の片山重則（かたやま しげのり）と申します。身に余る重責を仰せつかり、大変光栄であると同時に責任の重さを強く感じております。

私は1988年に徳島大学医学部を卒業し、以来脳神経外科医として数々の診療にあたってきました。脳血管内治療と外科治療の両方に関わってきましたが、脳血管内治療では心原性脳塞栓症に対する血栓回収術・動脈瘤塞栓術・頸部頸動脈ステント留置術などを、外科手術では良性脳腫瘍摘出術や三叉神経痛・顔面けいれんに対する微小血管減圧術などを中心に診療を行ってきました。2025年4月より、西脇市立西脇病院の病院長に就任いたしております。

西脇市立西脇病院は昭和26年に開設され、現在27科、320床で運用しております。地域医療支援病院・兵庫県北播磨災害拠点病院・へき地医療拠点病院などとして、良質な地域医療の提供を目標にしています。また高齢者人口が増加するなかで、高齢者にも優しい総合的な治療ができるように努めています。

医療現場が日々変化するなかで、病院経営、人材確保、そして地域間格差の是正など、多くの課題が山積しております。本協会には、県内の病院間の連携をはじめ、医療制度の改善提言、後進の育成など重要な役割があるかと思えます。その一端を担う立場として、少しでも協会の活動に貢献できるよう努めてまいりたい所存です。今後ともご指導ご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

**理事**

医療法人公仁会
姫路中央病院
理事長 東 靖人

このたび、兵庫県病院協会の理事を拝命することとなりました、医療法人公仁会姫路中央病院の理事長を務めております東靖人（ひがし やすと）です。大変光栄であると同時に、身の引き締まる思いであります。

私どもの病院は1972年の開院で、235床のケアミックス病院です。一般、回復期リハビリテーション、地域ケアと障害者病棟をもっています。地域では脳と消化器外科の病院として認知されてきました。兵庫県の認知症疾患医療センターに指定されており、昨年は病院機能評価を受審し認定していただいております。また昨年度から患者サポートセンターを開設しております。

ご存じの通り、今の医療界は本当に多くの課題を抱えています。人手不足や診療報酬の問題、地域による医療格差、そして加速する高齢化など、どれも待ったなしの状況です。そんなタイミングで理事に就任することになったわけですが、むしろこの状況を前向きに捉え、変化のチャンスにできればと考えています。

私は現在、兵庫県民間病院協会の副会長、姫路市医師会の副会長も務めており、地域の現場に深く関わる立場におります。その中で感じるのは、やはり「連携」の大切さです。病院同士のつながりはもちろん、行政や地域の皆さんとも手を取り合いながら、一つひとつの課題に取り組んでいければと思っています。理事としてはまだまだ若輩者ではありますが、現場のリアルな声を届け、少しでも協会活動に貢献できるよう、力を尽くしてまいります。どうぞ気軽に声をかけていただければ嬉しいです。今後とも、よろしくお願いいたします。

**理事**

赤穂市民病院
院長 林 晃史

この度、兵庫県病院協会理事に就任させていただきました赤穂市民病院の林晃史です。

赤穂市は兵庫県の南西部、岡山県との県境に位置しています。まちのほぼ中央を名水百選に選ばれた千種川が流れており、北は中国山系の山々、南は瀬戸内海国立公園の播磨灘に面しています。赤穂市民病院は、千種川の河口近くに立地しており、東西南北、病窓から見える景色は絶景です。

当院は昭和22年10月17日国保直営赤穂町立病院として開設されました。当時の診療科は内科・外科で病床数は44床でした。以後、地域医療の拠点として診療体制を拡充し、平成10年には新病院を現在の地に移転しました。現在は、27の診療科、360床（うち感染症病床4床）で運営しております。

少子高齢化、労働人口の減少が見込まれる中で、令和6年度の診療報酬が改定され、ベースアップ評価料など医療従事者の賃上げが盛り込まれました。医療従事者の収入が増えることで社会全体としては潤ってゆくことが期待されますが、現場の病院では人件費が経営を圧迫しています。委託費も高騰し、更には円安などによる光熱費・建築費などの諸物価の高騰もあり、病院の経営はますます厳しくなってきました。

医療は国にとっても地域にとってもなくてはならない基幹産業です。地域の医療機関、介護・福祉施設、行政と連携し、地域住民に安心して暮らしていただけるよう良質な医療を提供することが、病院の責務であると考えています。

ご指導・ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い致します。

一般社団法人兵庫県病院協会第6期役員（任期：令和7年6月21日～令和9年6月）

役職名	氏 名	所 属 ・ 職 名
会 長	大 村 武 久	社会医療法人甲友会 西宮協立脳神経外科病院 理事長
副会長	平 田 健 一	地方独立行政法人加古川市民病院機構 加古川中央市民病院 院長
	高 橋 玲比古	医療法人社団さくら会 高橋病院 理事長・病院長
	眞 庭 謙 昌	国立大学法人神戸大学 神戸大学医学部附属病院 前院長
	阪 上 雅 史	学校法人兵庫医科大学 常務理事・病院事業管理者
理 事	西 昂	医療法人康雄会 西病院 理事長
	木 原 康 樹	地方独立行政法人神戸市民病院機構 神戸市立医療センター中央市民病院 病院長
	築 部 卓 郎	日本赤十字社 神戸赤十字病院 院長
	飯 島 一 誠	兵庫県立こども病院 院長
	細 見 和 代	医療法人尚生会 湊川病院 理事長
	松 本 圭 吾	独立行政法人地域医療機能推進機構 神戸中央病院 病院長
	藤 久 和	公益社団法人日本海員掖済会 神戸掖済会病院 院長
	大 嶋 勇 成	兵庫県立尼崎総合医療センター 院長
	橋 本 創	医療法人旭会 園田病院 理事長・院長
	北 川 透	川西市立総合医療センター 指定管理者・医療法人協和会 理事長
	藤 原 英 利	独立行政法人国立病院機構 兵庫中央病院 院長
	片 山 重 則	西脇市立西脇病院 病院長
	岡 田 裕 之	日本赤十字社 姫路赤十字病院 院長
	井 上 喜 通	医療法人社団緑風会 龍野中央病院 理事長・院長
	東 靖 人	医療法人公仁会 姫路中央病院 理事長
	林 晃 史	赤穂市民病院 院長
	三 輪 聡 一	公立豊岡病院組合立 豊岡病院 病院長
	鈴 木 康 之	兵庫県立淡路医療センター 院長
監 事	栗 原 英 治	社会医療法人社団順心会 順心病院 理事長
	西 崎 朗	兵庫県立丹波医療センター 院長
名誉会長	守 殿 貞 夫	神戸赤十字病院 顧問・医療法人敬愛会 西宮敬愛会病院 名誉院長
顧 問	藤 原 久 義	兵庫県立尼崎総合医療センター 名誉院長・医療法人朗源会 おおくま病院 名誉院長
	澤 井 繁 明	社会医療法人愛仁会 明石医療センター 名誉院長
	太 城 力 良	学校法人兵庫医科大学 理事長
	大 西 祥 男	地方独立行政法人加古川市民病院機構 理事長

会員病院紹介

社会医療法人愛仁会

明石医療センター



病院長 大西 尚



◆はじめに

当院は兵庫県明石市にあり、JR大久保駅から徒歩15分の場所に立地する、東播磨医療圏域における中核病院の1つです。社会医療法人愛仁会が運営しており、民間でありながら公的責務を果たす「社会医療法人」として、地域住民の健康と命を守る使命を担っています。

22診療科・392床を有する地域医療支援病院として、地域の医療・介護関係機関、行政、消防局等と連携を密にし「地域医療」、「救急医療」、「先進低侵襲医療」、「周産期医療」を中心に、地域の皆様に信頼される良質で安心安全を心掛けた医療を提供することに努めています。また、高齢化、複雑化する急性期疾患に対応するために複数診療科の連携と多職種によるチーム医療を推進するとともに、地域連携強化による入退院支援の充実化を図っています。

かつては加古川第一陸軍病院として始まり、時代のニーズに応える形で徐々に規模を拡大し、現在は単なる「病院」ではなく、救急医療・高度医療・予防医療を融合した「医療のハブ」として機能しています。

◆救急医療

救急医療では、24時間365日循環器ホットラインをはじめとした救急医療体制を強化し、明石市救急における中等症～重症、CPA搬送を積極的に応需することに注力しています。

2024年度の明石市全域の救急車搬送件数は15,739件でしたが、当院では約3割にあたる4,917件の搬送を受け入れました。

◆周産期医療

地域周産期母子医療センターとして24時間体制で地域の周産期医療を担っています。妊娠後期の転院受け入れや母子同時対応が可能な体制を整え、安心して出産・育児ができる環境を提供しています。さらにお母さんと赤ちゃんが多職種の医療者に温かく包まれ、安心して出産ができる場所を提供することを目指し「ママ&ベビーセンター」と称してチーム医療を実践しています。また、妊娠婦の満足度向上を図るため、アメニティやサービス、産後ケアの充実を図るとともに、無痛分娩にも注力しています。

◆先進低侵襲医療

外科、呼吸器外科、産婦人科において、腹腔鏡下手術のみならず、da Vinci（ダヴィンチ）を用いたロボット支援下手術を積極的に推進しています。また、2025年3月より泌尿器科の常勤医師が3名体制となり、ロボット支援下手術も積極的に推進しています。

◆地域とともに歩む医療を目指して

明石医療センターは、単なる治療の場ではなく、地域の健康を支える「ライフパートナー」としての役割も果たしています。人間ドックや健康診断、生活習慣病予防の啓発活動など、予防医療にも力を入れています。

病気になる前の「健康づくり」の活動の一環として、地域住民の病気に対する知識や健康に関する

る意識を高めてもらうことを目的とした『市民健康講座』を実施しています。市民健康講座は、2020年度以降コロナ感染症拡大の影響で中止していましたが、2024年度より再開し、今年も毎月開催を予定しています。また、市民健康講座に参加したくても、身体機能面や交通手段の関係で参加できない地域住民の方々からもらっていますので、地域コミュニティからのニーズに合わせて、テーマに沿った専門職が地域に出向く『出前健康講座』も実施しています。

◆さいごに

今後、明石医療センターはAIや遠隔医療の導入、地域包括ケアの強化など、次世代医療への対応を加速させていきます。高齢化が進む社会において、医療の在り方は「治す」から「支える」へと変化しています。その中で、明石医療センターは「地域医療のモデルケース」となるべく、人と人がつながる医療を展開していきます。

———— 病院のモットー ————

患者さんに信頼される医療

———— 病 院 の 理 念 ————

1. 私たちは、患者さんを中心に、その期待に応える治療を行います。
2. 私たちは、地域との連携を密にして、社会に貢献します。
3. 私たちは、常に自己研鑽に励み、医療の質を高めます。

———— 病 院 概 要 ————

名 称：社会医療法人愛仁会 明石医療センター
所 在 地：兵庫県明石市大久保町八木743-33
管 理 者：病院長 大西 尚
職 員 数：診療部132名、看護部585名、技術部171名、事務部その他194名（2025年5月現在）
病 床 数：392床（ICU8床、HCU8床、NICU／GCU18床を含む）
診療科目：22診療科

総合内科・呼吸器内科・循環器内科・消化器内科・腎臓内科・糖尿病/内分泌内科・外科・消化器外科・呼吸器外科・心臓血管外科・整形外科・脳神経外科・産婦人科・リハビリテーション科・小児科・放射線科・病理診断科・眼科・泌尿器科・麻酔科・救急科・集中治療科

指定施設：・地域周産期母子医療センター

- ・兵庫県がん診療拠点病院
- ・兵庫県がん診療連携拠点病院
- ・日本医療機能評価機構認定病院臨床研修指定病院
- ・地域医療支援病院
- ・明石市災害対応病院



総合受付



カテーテル室



ハイブリッド手術室

編集後記

あつという間に梅雨が明け、連日猛暑日が続いていますが、会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。ここに令和7年夏季号をお届けいたします。

高橋玲比古副会長の巻頭言を通して音楽が持つ「癒しの力」と「命に寄り添う力」を実感しました。五嶋みどりさんの一つひとつの振る舞いから感じられたのは、演奏技術を超えた「人としての温もり」です。音楽は、音を超えて、人の内面に触れる手段でもあるのだとあらためて気づかされました。医療現場においても、患者と向き合う姿勢には“人間らしさ”が求められます。そしてそれは、共感し、寄り添い、励まし合う中で育まれていくものです。高橋病院における音楽と医療が共鳴する奇跡のような瞬間が目に見えます。

井上喜通理事からは龍野中央病院のある西播磨医療圏における医療・介護の将来像について言及され、来るべき超高齢化社会において医療資源が限られる中での地域完結型の医療提供体制の構築には「在宅医療・在宅看取り」の強化が不可欠とし、地域医療構想において療養病床は過剰と認定されている当地域では新たに病床を増やすのではなく、いかにして自宅や施設での看取りを可能にするかの在宅医療を支える仕組みを整備することが必要であり、そのために公的資源も優先的に投じられる必要があると提言されています。

三輪聡一理事の随筆では医師の地域偏在の問題が取り上げられ、豊岡病院が地域住民の「最後の砦」としての責務を果たす上での医師確保における困難について具体的に記述されています。医療は、人と社会を守る基盤です。しかしその持続には、資源、そして人材が欠かせません。個々の病院だけではなく行政も含め地域全体で医療を支える体制の強化についてあらためて向き合う必要があると痛感いたしました。

会員病院紹介では、明石医療センターが陸軍病院として始まった原点から常に時代のニーズに応え、発展し、今では、救急、周産期、低侵襲医療に加え、予防医療や健康教育にも力を入れる“医療のハブ”として地域医療を牽引されていることが紹介されています。高齢化社会の中で医療が果たす役割が多層的になる中「信頼される医療」—を理念に掲げ、救急・周産期・予防・教育を担い、さらにAI活用など未来医療にも対応する“地域医療のモデルケース”となるべく邁進されています。

このたび兵庫県病院協会理事として新たにご就任されました6名の先生方からは熱意あふれるご挨拶をいただきました。長年にわたる臨床経験や研究活動、病院経営に携わってこられた先生方が、医療制度の課題解決、人材確保、災害医療対応など、さまざまなテーマに挑んでおられます。地域医療に対する強い使命感と、医療体制の変化に柔軟かつ力強く対応されている姿勢が印象的です。

さいごに、ご多忙の中、会報の発行にご協力いただきました、執筆の先生方、編集事務の方々に心より感謝申し上げます。

(一社) 兵庫県病院協会理事・会報編集委員

岡田 裕之

日本赤十字社 姫路赤十字病院 院長 記

